

修士学位請求論文要旨

論文題名： 不安における無の開示と自己
——ハイデガー『存在と時間』第40節における二つの自同性——

所属研究科： 国際日本学研究科

専攻： 国際日本学専攻

研究領域： 文化・思想

学生番号： 4911246001

本論文は、ハイデガー『存在と時間』第40節における不安の分析を取り上げ、そこで語られる「自同性 (Selbigkeit)」が何を意味するのかを明らかにすることを目的とする。

ハイデガーは『存在と時間』第40節において、「自同性」という語を二つの異なる文脈で用いている。第一の自同性は、不安の何を前に (Wovor) ・何をめぐって (Worum) ・不安がること (Sichängsten) の三者が「世界内存在」として一致するという意味での自同性である。恐れにおいては、何を前にして恐れるか (迫りくる自動車) と何をめぐって恐れるか (自分の身体) とが区別可能であるのに対し、不安においてはこれらが分離しない。第二は、世界が世界として開示されることと、内存在が被投的な存在可能として開示されることが一致するという意味での自同性である。本論文の中心的な課題は、この二つの自同性が被投的投企の構造において統一的に理解されることを示すことである。

第1章では、第一の自同性の意味を恐れとの対比から明らかにした。情状性 (気分) は、それが「何の前で」 (Wovor) 生じるかという対象と、「何をめぐって」 (Worum) 生じるかという理由という二つの契機をもつ。恐れにおいてはこの二つが分離しており、特定可能である。迫りくる自動車を前にして、自分の身体をめぐって恐れる。これに対して不安においては、それらが「世界内存在」として一致する。また、それは「無規定的」であり、世界内部的な存在者のいづれでもない。不安において、ハンマーやチョークといった道具的存在者は、不安の対象ではない。しかしハイデガーによれば、不安の対象が道具的存在者のいづれでもないということは、「まったくの無」 (何も無いこと) を意味するのではない。不安の対象は、「非存在」 (存在者ではないもの) としての世界である。三者の自同性は、被投的投企としての世界内存在がこの非存在としての無に面していることを示している。ここで被投的投企とは、現存在がすでに世界の内に投げ込まれていること (被投性) と、可能性へと自己を投げ出すこと (投企) との統一的構造を指す。この自同性は、『存在と時間』第4節・第9節で示される現存在の自己関係性——現存在が自己の存在に態度をとって関わりつつ存在するという構造——が、不安という情状性において最も純粹に露呈することを意味している。

第2章では、第二の自同性、すなわち世界性と自己性の共属構造を検討した。ハイデガーにおいて「世界」とは、存在者の総体ではなく、存在者が意味をもって現れてくる場である。世界は「有意義性」の連関として成り立っている。ハンマーは釘を打つために、釘は板を固定するために、板は家を建てるためにある。このような「～のために」の連関が有意義性であり、この連関は最終的に現存在の存在に収斂する。このことは、現存在の自己なしには世界が成り立たないことを意味する。他方、『時間概念の歴史への序説』における「世界の存在と現存在の存在との独特な噛み合わせ」という記述に即して、現存在が「世界に基づいて存在している」こと、すなわち世界なしには現存在の自己が成り立たないことを確認した。世界の開示と自己の開示は、同一の事態の二つの側面である。そして、第一の自同性と第二の自同性が、被投的投企という同一の構造に基づき、現存在の自己関係性において統一的に理解されることを論じた。

第3章では、「形而上学とは何か」との連関において、無の開示と自己の成立の関係を検討した。『存在と時間』第40節の「無」と「形而上学とは何か」の「無」は、「非存在」（存在者ではないこと）として直接繋がる。仲原孝（2008）は先駆的覚悟性を經由して両テキストを繋げる解釈を提示しているが、本論文は、第40節の記述それ自体において「形而上学とは何か」との連関が見出しうることを示した。「無そのものが無化する」という命題を検討し、無が対象として現れるのではなく、自らを覆蔽し身を引くという仕方自己を開示することを明らかにした。無化とは、存在者を殲滅することでも否定から生じることでもなく、無が身を引いて存在者だけが残る出来事である。無が身を引くことで、存在者が「無ではないもの」として際立ってくる。そして「無からの自己」という概念を提示し、無の開示を通じて初めて自己が自己として成立する根拠を論じた。自己は無から「生じる」のではなく、無の開示によって自己として「露呈する」のである。日常的には世人的な規定によって覆い隠されていた自己が、無の開示において露呈するのだ。

第4章では、有意義性の剥落と自己の露呈の意味を検討した。不安において世界は「完全な無意義性という性格をもつ」とハイデガーは述べている。道具的存在者は「～のために」という意味連関を失い、われわれに何も語りかけなくなる。本章ではこの「無意義性」を無の開示の帰結として位置づけ、無意義性そのものが無なのではないことを明らかにした。無意義性は、無の開示がもたらす現象的・経験的側面である。また、世人的規定の剥落によって露呈する「純粋な自己」と、第3章で提示した「無からの自己」が、同じ事態の二側面であることを示した。純粋な自己とは、自己の存在そのものが問いに付される地点にまで追い込まれた自己であり、無からの自己とは、そこから繰り返し存在へともち直される自己である。両者は、被投性の「その都度という性格」——被投性が一度きりの過去の出来事ではなく繰り返し引き受けられるものであること——において一つになっている。その上で、陶久明日香（2016）の解釈を検討し批判した。陶久は、不安における有意義性の剥落を「リセット」機能として捉え、気分の変化によって有意義性の内容が入れ替わると論じている。しかしこの解釈は、自己の存在を確保しつつ有意義性の中身だけがリセットされるという理解に留まっている。不安において問題になるのは自己の存在そのものであり、「存在しないこともありえた」という可能性に直面することが不安の根本経験である。本来の有意義性の引き受け直しは、確保された枠の中での中身の更新ではなく、存在そのものが問いに付される地点から、自己の存在を引き受け直すことである。

第5章では、以上の考察を踏まえ、世界性と自己性の共属構造を知ることの意味と、先駆的覚悟性への展望を示した。共属構造を知るとは、それからの「解放」を意味するのではなく、むしろそれを引き受けることが本来性の条件である。世人は、不安を恐れに転化させ、死を匿名化し、世界内部的な存在者への没頭によって共属構造を覆い隠す。良心の呼び声を聴くこと、死への先駆が、この覆い隠しを突破する契機となる。

以上の考察により、二つの自同性が被投的投企の構造において統一的に理解されることが明らかになった。不安において、世界内存在は無に面し、現存在に対して自己の存在をそ

の都度新たに引き受け直すことを要求する。二つの自同性が指し示しているのは、まさにこの事態にほかならない。

文献

1. ハイデガーの文献（冒頭に各書の略記号を示す）

SZ : Heidegger, Martin., *Sein und Zeit*, 11. Auflage, Tübingen: Max Niemeyer., 1967.

GA3 : *Kant und das Problem der Metaphysik*, Vittorio Klostermann, 1991.

GA9 : Heidegger, Martin., „Was ist Metaphysik“, In: *Band 9 Wegmarken*. 2. Auflage, Vittorio Klostermann, 1996.

GA20: *Prolegomena zur Geschichte des Zeitbegriffs* (Sommersemester 1925), Vittorio Klostermann, 1979.

GA27: *Einleitung in die Philosophie* (Wintersemester 1928/29) , Vittorio Klostermann, 1996.

2. ハイデガー以外の外語文献

Ratcliffe, Matthew. "The Feeling of Being", *Journal of Consciousness Studies*, Vol. 12, No. 8-10, 2005, S. 349-72

Shockey, R. Matthew. "Heidegger's Anxiety: On the Role of Mood in Phenomenological Method." *Bulletin d'analyse phénoménologique* XII, 2016., S. 1-27

Withy, Katherine. "The Methodological Role of Angst in Being and Time," *Journal of the British Society for Phenomenology* (Accepted Manuscript) , 2012, S. 2-31

3. 邦語文献

陶久明日香「情状性/気分の規定力」『フッサール研究』第13号、2016年、S. 66-85

古荘真敬「ハイデガーの『不安』論再読のための覚え書」『論集』東京大学大学院人文社会科学系研究科哲学研究室、第四二巻、2023年、S. 1-19

貫井隆「ハイデガー『存在と時間』における『先駆的決意性』と『不安の無意義性』の整合的解釈の試み——『先駆的決意性における不安』の『時間性』に基づく理解から」『人間存在論』京都大学大学院人間・環境学研究科『人間存在論』刊行会、2021年、S. 45-59

松本直樹「潜在する根本気分」『宗教哲学研究』宗教哲学会、第三九巻、2022年、S. 43-59